

## 「荒城の月」の解釈雑感

土井晩翠作詞、滝廉太郎作曲の「荒城の月」の合唱曲を練習している。日本の名曲としてあまりに有名な「荒城の月」は小学校の唱歌として歌った記憶が最初であった。哀切のあるメロディーと七五調の歌詞は心に深くしみわたるものであった。しかし歌詞を深く読み解くには至らなかった。合唱曲として歌うとき歌詞をどのように解釈し、心を込めて歌うのかはとても重要である。この際、歌詞の意味について考察する。

インターネットなどで調べてみると、「荒城の月」の解釈は様々見受けられる。その中に作詞者の土井晩翠が自ら語った文章を見つけた。以下にその文章を紹介する。土井晩翠は会津鶴ヶ城に立って何を思ったのか、生まれ故郷の仙台青葉城で何を感じたのか。歌詞の内容に思いをよせ、その一部でも歌声に込めることができれば心のこもった合唱になるはずである。

「土井晩翠が 1947 年 6 月 29 日滝廉太郎 45 年祭で語り放送された内容を綴った文」(ページ公開 2002 年 10 月 19 日 渡辺美奈子)

<http://members3.icom.home.ne.jp/goetheschubert/bansui.htm>

以下に内容を抜粋し示す。内容は口語調に修正し、一部注釈を加えている。

東京音楽学校が中等唱歌集の編集を企て、当時の文士にそれぞれ出題して先ず詩を求めた。私(晩翠)にあてられたのは他の二篇とともに「荒城の月」であった。この題を与えられて、まず第一に思い出したのは会津若松の鶴ヶ城であった。

明治維新史上の劈頭(へきとう;最初)を飾る会津落城の悲劇と殉難苦節とはあまりにも著名である。

賊軍の汚名を受け、奥羽諸藩連盟の主動者として三道より進み来た天下の大軍を引き受け、三旬の籠城に耐えたが、城外の友軍ことごとく掃蕩され、悪戦苦闘の城兵も糧食尽きて補充の道がない。その時征討軍参謀板垣退助が賊名を負ひて空しくたおれるを惜しみ、会津藩主松平容保に帰順勸告書を送った。これを読み沈思黙考の末将士を集めてこの問題を議論したが容易に決せず。その時容保は一身の刑死を覚悟し、部下を助命せんと決心し諸将士を慰諭(いゆ;なだめさとす)して遂に開城に決した。かくて明治元年戊辰九月二十四日鶴ヶ城頭高く錦旗がひるがえった。

九月二十二日の夜秋天碧水の如く明月城頭に懸つた頃、奥御殿奉仕の山本八重子が箭(せん;矢の竹の部分)を以て白壁に題した。

明日よりはいつくの誰か眺むらん、馴れし大城に残る月影

これより先き敵軍の来襲いよいよ迫る報に接し、八月二十二日藩公自ら馬を陣頭に進めた。その時その前後を護った中堅は史上著名の「少年團結白虎隊」である。彼らは転戦の末会津城外一里の飯盛山に集り、郭内の邸宅民家数千所々兵火にかかり、紅焰天を焦す間に鶴ヶ城の五重の櫓の隠見するを見て「君公は城と運命を共にされたであらう」と哭し（こくし；泣き悲しみ）、跪きて（ひざまずきて）城を遥拝し終りて十九少年皆自刃した。

私（晩翠）が鶴ヶ城及び飯盛山を訪ひて多大の印象を脳裏に残したことは何も怪しむに足らぬ。それで音楽学校から「荒城の月」の歌詞を命ぜられた時、第一に念頭に鶴ヶ城が浮んだのである。

私（晩翠）の故郷の仙台の青葉城、三百余年前文武兼備の名君伊達政宗卿 - 「出づるより入る山の端はいづくぞと月に問はまし武蔵野の原」の名吟により、近衛公はじめ都の歌人を驚嘆せしめた - 名君の建設の青葉城(今その荒廢の趾を前にして私がこの筆を執りつつある) - この名城も詩の材料を供したことは言うまでもない。

「垣に残るは唯かづら、松に歌ふは唯嵐」はその実況である。

君（滝廉太郎）は二十一歳の頃大分に帰省の際、竹田町郊外の岡の城趾でこの曲を完成した。

今を去ること五年前、瀧君の四十年祭挙行之時も私は招かれて参加し、一篇を靈前に捧げた。当時と五年後の今日とを対照して感慨無量である。國破れて山河あり、全国が荒城そのものである。私の詩は四十余年の昔に今日あるを予言したような感があるではないか。

「天上影は變らねど  
榮枯は移る世の姿」

春夏秋冬の推し移る通り、まったく弱り切っている冬枯れの日本も、いつかは春が来るであらう。



以上から推察し、多くの訳詞を参考にまとめてみる。しかしこれは私の独断である。団員のみなんで推敲し完成させてほしい。

歌詞	訳詞
1. 春高樓の花の宴 巡る杯影さして 千代の松が枝分け出でし 昔の光い今いずこ	春、高くそびえたつこの城で花見の宴が催され、酒を注いで回した盃にも月の光がさしていた。何千年と生きた松の枝にも月の光がさしていた。この昔の栄光はどこに行ったのだろうか。
2. 秋陣営の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて 植うる剣に照り沿いし 昔の光今いずこ	秋、戦に敗れ陣営に冷たく張り詰めた空気が流れていた。鳴きながら飛んでいく雁の数が数えられるほど明るくさしていた月の光、城兵達が地面に突き立てた刀を光らせていた月の光、その月の光には春のにぎやかさはもうない。
3. 今荒城の夜半の月 変わらぬ光 誰がためぞ 垣に残るはただかつら 松に歌うはただ嵐	今、荒れ果ててしまった城に降り注ぐ月の光は昔と変わらない。誰のために何のために光っているのか。城に残っているのは石垣のつると、松の枝を吹き抜ける風音のみで、誰もいないのに。
4. 天上影は変わらねど 栄古は移る世の姿 映さんとてか今も尚 ああ荒城の夜半の月	空に輝く月は変化しないけれど、人の世は栄枯盛衰を繰り返す。その姿を映そうとしてなのか、ああ今もまた月の光は、荒れ果てた城に降り注ぐ

以上

平成 28 年 1 月 14 日

男声合唱団 阪南メンネルコール

江川 猛